

本当に美しい心とは・・・

情報通信工学科 2 年 東 育誠

十一年前に起きた猟奇殺人事件「神戸連続児童殺傷事件（酒鬼薔薇事件）」を覚えているでしょうか？この本はその事件を意識して書かれています。酒鬼薔薇事件は社会に強い衝撃を与えた事件であったため、この本以外にも多くの本が出版されました。しかし、この本がその他多くの本と違うところは、殺人犯とされる少年にスポットライトをあて、いわゆる社会正義が過剰に振りかざされ、犯人やその親を糾弾するようなものではないということです。もちろん、罪の重さに関する言及はありますが、それは外野が勝手に騒ぐといったものではなく、当事者の一人となってしまった人間の肉声として語られているのです。

「それが最悪の行いでも、誰かがわかってやる必要があるのではないか。」殺人犯である少年の兄、そしてこの本の主人公はそう考えてきました。「なぜ弟があんなことをやったのか、その理由を探そう。追い込まれたにしろ、自分から突き進んだにしろ、あの状況にカズシを向かわせる何かがあったはずだ。」

人を殺すことは簡単には理解できないだろう。でも理解しようという気持ちをなくしたらダメだと思った。最低の人間だって、誰かが寄り添ってあげてもいいはずだ。

僕はいつも悲しいニュースを見るたびに考えていました。人は誰かを責めないと生きていけない生き物なのだろうな、と。

殺人を犯そうとも、お金を盗もうとも、その人が人であるということは変わらないのに、人々は何も考えずに彼らを責めます。酒鬼薔薇事件のときもそうでした。殺人を犯した犯人だけではなく、家族までもが過剰に責められていました。明らかに人権を侵害した内容の雑誌、「お前らが死ね」そんな内容が書きつらねられている手紙、全く関係のない他の人に何が分かるのでしょうか？被害者の家族に追悼の言葉を送るのではなく、犯人の家族に暴言を吐くのです。それは本当に正しいことでしょうか？僕の目にはただ自分の向けようのないストレスを吐き出す為に、それを正当化するために犯人、そしてその家族を責めているようにしか思えないのです。

今年の六月にあった秋葉原通り魔事件では、傷ついた人々を助けたりせず、その様子をカメラにおさめていた人々がいました。それは本当にモラルのある行為なのでしょうか？ただおもしろがっているだけではないのでしょうか？

僕にとって本当に恐ろしいものは、殺人犯ではなく、こういった何か大きな事件があるたびにおもしろがる醜い人々の心です。そういった人々が間違った正義を振りかざし、自分を正当化し、誰に間違いを正されることもなく生きていくのです。正義とは一体何でしょうか？事件をおもしろがったからといってもその人々は人を殺すことはまずないでしょう。

しかし、このような事件が起こるたびに浮き彫りにされる人々の醜い心は確実に現代社

会を蝕んでいくと考えます。

僕は、この本の主人公である少年から、本当に正しいことと優しさを学びました。間違いのない世界なんてありません。だからこそ、その間違いを正せるのは、本当に心からその人の側に寄り添ってあげられた人だと思います。傷つくことが怖いから、他人を傷つけていいわけがありません。どんなにひどい行いをした人だって、むやみに傷つく必要はないのです。互いが寄り添い、助け合い、傷つけあっても許し合うことができるなら、きっと僕達は本当の強さを手に入れることができるのだと信じて、僕はこれからの人生を歩んでいこうと思います。

『うつくしい子ども』 石田衣良著 文芸春秋